



障がいの社会モデルと医療モデルって？



A. 障がいに対する考え方の違いなの。

障がいに対する考え方として、2つの考え方があるの。
社会モデル、といわれるものと、医療モデルといわれるものね。
これは、障がいというものが社会と医療とのどちら側に帰属するか、ということなの。

社会モデルという考え方は、障がいや不利益・困難の原因は、障がいのない人たちを前提に作られた社会のルールや仕組みに原因がある、という考えかたなのね。
障がいのある人、というのは社会の障壁によって能力を発揮する機会を奪われた人々、と考えるの。
社会が障がいを作り出しているから、それを解消するのは社会の責務である、ということね。

車椅子に乗っている人が、階段しかない駅なので電車に乗れないとしたら、エレベーターが無いということが社会の障壁、ということになるわね。
エレベーターがあれば、ひとりで2階まで行けるので障がいを感じなくても済む、こういうことが社会によって能力を発揮する機会を奪われる、ということなのよ。

社会モデル、という考え方は、“立って歩けない” “目が見えない” “聞こえない” などの身体機能の制約が障がいなのではなく、“階段しかない駅” など、社会の在り方・仕組みが障がいというものを作り出している、とするの。
ひとりで出かけできなくても、誰かがサポートするなどの、社会的サービスが充実していれば安心して出かけできる、ということよ。

医療モデル、というのは、障がいのある人が感じる社会的不利というのは、その人個人の問題である、という考えかたなの。

駅で電車に乗るとして、階段がなくホームまでが5メートルの壁だけだったらどうなる？
手で登って電車に乗れ、といわれれば、ちょっと無理がある話よね。
ということは、健常の人でも壁を越えられないので電車に乗れない、という障がいを持つということになるわ。
このような建物で、空を飛べないとか、5メートルをジャンプできない人に問題がある。
だったら、空を飛べるようにするか、5メートルをジャンプできるようにしましょうね、という考えかたなのよ。

階段が使えずに電車に乗れないのはその人の身体機能に制約があるから、だからどんなに困っても責任はその人にある、と考えるわけ。

でも、かわいそうだから身体能力が高くなるように援助してあげよう、という考え方につながっていくわ。

この考え方では、社会的不利は障がいのある人自身の問題なので、社会が差別したわけではない、という逃げ口上にもなるわね。

多数派(マジョリティ)はこれでやってるんだから、それに不自由を感じている少数派(マイノリティ)は我慢しろ、という考え方に行きついてしまうの。

これはもう人権の問題なの。

でも、マジョリティがマイノリティを意図的に排除しようとして生まれた考え方ではなくて、マイノリティのことを意識していない、もしくはマジョリティのみ優遇されているという事実鈍感なだけ、ということが悲しいの。

2006年に国連総会で障がいの社会モデルの考え方が「障がいのある人の権利に関する条約」に採択されて、日本は2014年に批准したの。

この考え方に基づいて2016年4月から「[障害者差別解消法](#)」が施行されました。

単に心身機能の障がいだけではなく、社会的障がいと合わさることで制限を受けているという社会モデルの考え方が取り入れられているのよ。

障がいのないマジョリティの人も、障がいのあるマイノリティの人も、共に同じ社会で生きていこう、という考えかたね。

[でも、これは障がいに限って、の話ではないのよ。](#)

マイノリティが生きづらい原因が、社会のルールや仕組みにこそある、ということを考えなければ、本当の意味での共生社会にはならないわね。

[《MENU》](#)

[《サービスの利用者負担額のほかにお金はかからないの？](#)

[常勤・非常勤、専従・兼務ってなんのこと？》](#)

2021-07-12 掲載